

北陸支部

次世代の建築家育成を通して
地域会の活性化をはかる

原田 学
北陸支部
福井地域会会長



竹内申一
北陸支部
石川地域会副会長



水野 敦
北陸支部
富山地域会会長

北陸支部の活動

北陸支部は全国に先駆けて準会員制度を発足させるなど、早くより次世代の建築家育成に力を入れてきた。福井地域会では小学生以下の子どもを対象とした絵画コンクール事業、石川地域会では小学生を対象に街づくりを考える子供建築塾を開催してきた。子どもたちに建築の面白さを伝える事業は福井・石川地域会の中でしっかり定着し、参加を楽しみにしている子どもたちも増えてきている。

富山地域会は支部の中で準会員活動が最も活発で、会員同士の定期交流、勉強会、正会員事業のサポートなどが行われていたが、小学生から大学生までを対象とするような次世代の建築家育成事業はあまり行われてこなかった。そこで福井・石川地域会のように活動にも力を入れようと話し合い、建築に興味を持ち始めた高校生を対象とした事業「ONE ワク」(1日設計課題 one-day-works)を2018年にスタート。翌年以降は大学生を含めた事業へ進化し、コロナ禍にあった近年はオンライン化により北陸支部内の学生が参加するような事業となっている。(『JIA MAGAZINE』386号参照)

その後、福井地域会では新たに高校生を対象とした青少年育成事業、石川地域会では高校生のためのワークショップを開始している。このように、支部内で情報交換しながら、それぞれの地域性を考慮したかたちで次世代の建築家育成に向けて活動している。(水野 敦)



石川地域会／子供建築塾



富山地域会／高校生を対象とした事業「ONE ワク」

福井地域会 高校生支援活動

福井地域会は、18年以上にわたり小学生を対象に絵画コンクールを通じて青少年育成を目指して活動してきたが、世の中の建築への人気減少と何より会員減への焦りなどから、若い世代のリアルな建築への思いが今どうなっているのかももう少し知りたいという意見が多くあった。そうした中、富山のワークショップから大いに刺激を受け、建築に興味を持っている若い世代がもう少し上の世代に直に触れあえる機会を模索した。

会員のツテにより2021年に工業高校の授業を手伝う機会を得て、建築甲子園へ出品直前の生徒たちに批評アドバイスをしたり、また自分たちが実際に仕事で使っている3Dでの提案事例や、プレゼンでのコツなどを話すことができた。全部で3回、延べ12人が参加した。そこで衝撃だったのは、今後建築の道に進みたいと考えている生徒は19人中ほんのひと握りしかいなかったという事実だ。

今年はさらに高専でもこのような機会を得られることになり、この10月と11月に授業にお邪魔することとなっている。さすがに高専では将来的にも建築に進もうと考えている生徒が多いそうである。しかし、事前の打ち合わせの中で教師の多忙すぎる実態や、進路指導などの苦悩を知ることとなった。このように専門教育の実態に触れることができただけでも、我々の業界の未来に、より具体的な活動指針を計画する上で重要な知見となるであろう。

毎年、建築士会と建築士事務所協会、JIAの3会合同



工業高校の授業を支援

で行っている福井建築賞の公開審査会に、昨年の工業高校の生徒が見学に来てくれた。授業支援での交流を通じて、多少なりとも建築の世界に興味を持ってくれたことにつながっているのかもしれないと思うと、皆、これからも継続していくことが必要と感じている。

今年が2年目で、学校側の諸事情とこちら側の人員のやりくりなど課題はあるものの、長期的な視点で花が咲き実になることを期待したい。まだ種をまいて発芽したばかりなのであるから。(原田 学)

石川地域会 高校生のための建築ワークショップ

石川地域会は、2021年から谷口吉郎・吉生記念金沢建築館が主催する「高校生のための建築ワークショップ」の企画および運営を全面的にサポートしている。石川地域会では、これまで10年以上にわたって小学生を対象とした建築ワークショップを開催してきた。その活動に加えて「より近い未来に地域の建築文化の担い手となる人材を育てる」という趣旨から、高校生を対象とするワークショップに注力することとなった。

金沢市内の高校を対象に募集を行い、コロナ禍ではあったが、2021年は11名、2022年は12名の生徒が参加した。ワークショップは2日間行われ、参加者たちは与えられたテーマに対して建築提案を考え、スケッチと模型を作成してプレゼンテーションを行う。高校生1人につき建築学科の大学生1人がサポートとしてつくため、2日間とはいえ見応えのある作品が並ぶ。

2021年のテーマは「みんなのバス停」で、バスを待つのが楽しくなるようなバス停を考えてもらった。写真の作品は、21世紀美術館周辺の芝生がめくれ上がった丘のようなバス停で、美術館側からは芝生しか見えず、道路側には洞窟のような空間が広がっている。2022年のテーマは「まちの居場所」で、金沢のまちの中心部にほっとひと息つける小さな居場所(休憩所)を考えてもらった。どちらも小規模ではあるが、大学生に引けを取らない魅力的な建築が提案された。開催後のアンケートを見ると、2日間を通して大学生とコミュニケーションを取ることにも良い経験となっているようである。建築を学ぶ楽しさや建築の魅力を近い世代から聞くことは、建築の領域へ進もうとする高校生たちのモチベーションを確実に高



「みんなのバス停」をテーマにつくられた模型

めてくれそうだ。

2年間の活動を通して、高校生を対象としたワークショップの可能性を大いに感じている。近い将来、彼らが我々のメンバーとして活動してくれることを期待しながら、今後できる限り継続していきたいと考えている。

(竹内申一)

富山地域会 ペチャクチャ

7月初旬、富山大学芸術文化学部との合同イベントとして「ペチャクチャ」を開催した。20filmを20秒でプレゼンテーションするこのスタイルは、建築家のアストリッド・クラインとマーク・ダイサムの2人によって考案され、すでに20年近く経つが、あえてこの時期に再びというのは、企画立案をされた富山大学芸術文化学部の上原雄史教授の熱い思いがある。日頃から学生を指導するなかで、彼らの元気のなさが目に付き、特に自分の考えた課題に対してネガティブな意見を受けると、途端に思考回路が止まってしまう。そんな学生に多角的な視点を持ってもらいたいということから、建築家たちが日ごろ何を面白いと考え、何に挑んでいるのかを学生たちに話しかける機会をつくりたいと考えた。

また私たち富山地域会は、地域の建築家たちと大学との交流が薄いことを危惧し、学生たちをサポートするようなプログラムがないかと考えていたところでもあった。

今回のペチャクチャは「気付き」をテーマに、教員、学生を含めた10名がリレー形式で発表し、その後、来場者の質問を受けながらトークセッションを行った。年齢、性別、職歴などの異なる10名の発表はそれぞれに魅力があり、当初目的であった複数の視野を持つことの意義を十分感じさせてくれるものとなった。この日の手応えをもとに、11月には第2弾として、高校生を巻き込んだイベントを開催するべく、現在準備中である。

今後は「ONE ワク」で接点生まれた高校生と大学をつなげ、さらには就職先として設計事務所をつなげ進路を見えやすくすることで、建築家を志す若者の裾野を広げることができ、地域会の活性化につながる好循環を生むことに期待している。(水野 敦)



富山大学芸術文化学部と合同で行った「ペチャクチャ」